



TITLE:

# Subanalytic幾何とPL位相(実特異点の研究)

AUTHOR(S):

塩田, 昌弘

---

CITATION:

塩田, 昌弘. Subanalytic幾何とPL位相(実特異点の研究). 数理解析研究所講究録 1991, 764: 17-22

ISSUE DATE:

1991-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/82272>

RIGHT:

## Subanalytic 幾何と PL 位相

名大養 塩田昌弘 (Masahiro Shiota)

問題 Subanalytic 集合の色々な位相的性質は, "subanalytic" のどの性質から生まれてくるか.

解 次に示すように, "analytic" によるのではなく, すべての subanalytic 集合の族が, 余り大き過ぎも, 小さ過ぎもせず, ある演算で閉じているから.

定義  $\mathcal{A}$  を次の条件を満たす,  $\mathbb{R}^n$ ,  $n = 0, 1, \dots$ , の部分集合の族とする.

(i) どんな  $\mathbb{R}^n$  の代数的集合も  $\mathcal{A}$  の元.

(ii) もし  $X_1, X_2 \subset \mathbb{R}^n$  が  $\mathcal{A}$  の元なら,  $X_1 \cap X_2$ ,  $X_1 - X_2 \subset \mathbb{R}^n$  も  $X_1 \times X_2 \subset \mathbb{R}^{2n}$  も  $\mathcal{A}$  の元.

(iii)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を  $\mathcal{A}$  の元とする.  $p: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  を,  $p|_X$  が proper な射影とする. すると  $p(X)$  は  $\mathcal{A}$  の元.

(iv)  $X \subset \mathbb{R}$  が  $\mathcal{A}$  の元なら, 任意の点  $a \in X$  に対して  $a$  の  $\mathbb{R}$  での近傍  $\cup$  と  $b, c \in \mathbb{R}$  が存在して,  $X \cap \cup = a$ ,  $[a, b]$ ,  $[b, a]$  又は  $[b, c]$  となる.

$\mathcal{A}$  の例の一番目は、すべての半代数的集合で、二番目は、すべての subanalytic 集合である。  $\mathbb{R}^n$  の部分集合で、有限個の Pfaffian 多様体に分割できるもの全体は、 $\mathcal{A}$  の例になると思われるが、証明はできていない (Van den Dries [2] を参照)。  $y = \exp(x \text{ の有理関数 })$  のグラフをすべて含む  $\mathcal{A}$  は存在するか、どうか分らない [2]。もし、そんな  $\mathcal{A}$  が存在すれば、  $y = \exp(-1/x^2)$  のグラフと  $x$  軸の和集合を考えれば、Łojasiewicz の不等式は、 $\mathcal{A}$  で必ずしも、成り立たないことが分かる。

以下  $\mathcal{A}$  を一つ仮定して、 $\mathcal{A}$  の元は subanalytic 集合の位相的性質を、ほぼ、すべて持っていることを示したい。  $r$  を正なる自然数とする。  $\mathcal{A}$  の元を  $\mathcal{A}$ -集合と呼ぶ。  $\mathcal{A}$ -集合間の連続写像を、もしそのグラフが  $\mathcal{A}$ -集合のとき、 $\mathcal{A}$ -写像と呼ぶ。  $\mathcal{A}$ -関数、 $\mathcal{A}$ -ベクトルバンドル等も自然に定義する。

(1)  $X \subset \mathbb{R}^l$  と  $Y \subset \mathbb{R}^m$  と  $Z \subset \mathbb{R}^n$  を  $\mathcal{A}$ -集合とし、  $f_1$  と  $f_2$  を  $X$  上の  $\mathcal{A}$ -関数、  $f: X \rightarrow Y$  と  $g: Y \rightarrow Z$  を  $\mathcal{A}$ -写像とする。 任意の有界集合  $B \subset \mathbb{R}^l$  に対して、  $f_1(X \cap B)$  と  $f_2(X \cap B)$  と  $f(X \cap B)$  は有界だとする。 そのとき、  $f_1 f_2$  と  $f_1 + f_2$  は  $\mathcal{A}$ -関数で、  $g \circ f$  は  $\mathcal{A}$ -写像である。

$h = (h_1, \dots, h_m): X \rightarrow \mathbb{R}^m$  を写像とし、任意の有界集合  $B \subset \mathbb{R}^l$  に対して、  $h(X \cap B)$  が有界だと仮定する。すると、  $h$  が  $\mathcal{A}$ -

写像である為の必要十分条件は、すべての  $h_i$  が  $\varepsilon$ -関数であること。

(2)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を空でない  $\varepsilon$ -集合とする。すると  $X$  の閉包  $\overline{X}$  は  $\varepsilon$ -集合で、 $X$  からの距離関数は  $\varepsilon$ -関数である。

(3)  $f$  を  $\varepsilon$ -開集合  $U \subset \mathbb{R}^n$  上の  $C^1$   $\varepsilon$ -関数とする。すると  $\frac{\partial f}{\partial x_1}, \dots, \frac{\partial f}{\partial x_n}$  は  $U$  上の  $\varepsilon$ -関数である。

(4)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を  $C^1$   $\varepsilon$ -部分多様体とすると、接バンドル  $TX \rightarrow X$  は  $\varepsilon$ -ベクトルバンドルである。

(5)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を  $m$ 次元  $C^1$   $\varepsilon$ -部分多様体とする。  $G_{n,m}$  を  $\mathbb{R}^n$  の中の  $m$ 次元部分空間全体のグラスマン多様体とする。自然に、  $G_{n,m}$  は  $\mathbb{R}^{n^2}$  の中の代数的部分多様体とできる。そのとき、集合  $\{(x, T_x X) \in X \times G_{n,m}\} \subset \mathbb{R}^n \times \mathbb{R}^{n^2}$  は  $\varepsilon$ -集合になる。

(6)  $X \subset \mathbb{R}^n$  と  $Y \subset \mathbb{R}^n$  を  $\varepsilon$ -集合とし、  $f: X \rightarrow \mathbb{R}^n$  を  $\varepsilon$ -写像とする。もし、任意の有界集合  $B \subset \mathbb{R}^n$  に対して、  $f^{-1}(B)$  が有界なら、  $f(X)$  は  $\varepsilon$ -集合である。もし、同じ  $B$  に対して、  $f(X \cap B)$  が有界なら、  $f^{-1}(Y)$  は  $\varepsilon$ -集合である。

(7)  $X \subset \mathbb{R}^n$  と  $Y \subset \mathbb{R}^n$  を  $C^1$   $\varepsilon$ -部分多様体とし、  $f: X \rightarrow Y$  を  $C^1$   $\varepsilon$ -写像とする。任意の有界集合  $B \subset \mathbb{R}^n$  に対して、  $f(X \cap B)$  は有界だと仮定する。すると、  $f$  の特異点集合は  $\varepsilon$ -集合である。

(8)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を有界な  $\varepsilon$ -集合とする。すると、  $X$  の連結成分

は有限個で、各成分は  $\mathcal{K}$ -集合である。

(9)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を空でない  $\mathcal{K}$ -集合とする。すると、 $\overline{X} - X$  の次元は  $X$  の次元より小。(  $\dim \emptyset = -1$  と見なす。 )

(10)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を空でない  $\mathcal{K}$ -集合とする。すると、 $X$  の  $C^r$  特異点集合は  $\mathcal{K}$ -集合で、その次元は  $X$  の次元より小さい。よって  $X$  は  $C^r \mathcal{K}$ -分割をもつ。

(11)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を  $\mathcal{K}$ -集合とし、 $\overline{X} - X$  は  $0$  を含むとする。すると、 $\mathcal{K}$ -曲線  $\varphi: [0, 1] \rightarrow \overline{X}$  が存在して、 $\varphi(0) = 0$  かつ  $\varphi((0, 1]) \subset X$  とできる。

(12)  $X \subset \mathbb{R}^n$  と  $Y \subset \mathbb{R}^m$  を空でない  $C^r \mathcal{K}$ -部分多様体とし、 $Y \subset \overline{X} - X$  と仮定する。 $X$  と  $Y$  が、そこで Whitney 条件を満たさない  $Y$  の点全体を  $Y'$  とする。すると  $Y'$  は  $\mathcal{K}$ -集合で、次元は  $Y$  の次元より小。

(13)  $X \subset \mathbb{R}^n$  をコンパクトな  $\mathcal{K}$ -集合とする。すると、多面体  $Y \subset \mathbb{R}^m$  と、 $\mathcal{K}$ -同相写像  $\varphi: Y \rightarrow X$  が存在する。

$f$  を  $X$  上の  $\mathcal{K}$ -関数とする。すると、上の  $Y$  と  $\varphi$  を、 $f \circ \varphi$  が区分的に線型になるようにとれる。

さらに、 $Y$  と  $\varphi$  は、次の意味で、一意的である。もし別の  $Y_1$  と  $\varphi_1$  が存在すれば、 $Y$  から  $Y_1$  への区分的に線型な同相写像  $\pi$  が存在して、 $f \circ \varphi_1 \circ \pi = f \circ \varphi$  となる様にできる。

(14)  $r$  を、 $r$  より小さい、負でない整数とする。 $X \subset \mathbb{R}^n$  と

$Y \subset \mathbb{R}^n$  を  $C^r \mathcal{A}$ -部分多様体とし,  $f: X \rightarrow Y$  を  $C^{r'} \mathcal{A}$ -写像とする. すると,  $f$  は  $C^{r'} \mathcal{A}$ -写像  $g$  で近似できる. 位相は,  $r'$  階までの  $f$ - $g$  の導関数が任意の正の  $\mathcal{A}$ -関数より, 小さく取れる, そんな位相である.

(15) Thom の横断性定理の  $\mathcal{A}$  の場合は成り立つ. 位相は上の位相である.

(16)  $r'$  を  $r$  より小さい, 正の自然数とする.  $C^{r'} \mathcal{A}$ -部分多様体  $X \subset \mathbb{R}^n$  に対し, 恒等写像に任意に近い,  $C^{r'} \mathcal{A}$ -同相写像  $\pi$  が存在して,  $\pi(X)$  は  $C^r \mathcal{A}$ -部分多様体になる.

(17)  $X \subset \mathbb{R}^n$  を, コンパクトでない, 有界な,  $C^r \mathcal{A}$ -部分多様体とする. するとコンパクトな, 境界付  $C^r \mathcal{A}$ -部分多様体  $Y \subset \mathbb{R}^n$  が一意的に存在して,  $X$  は  $Y$  の内部と  $C^r \mathcal{A}$ -同相になる.

(18)  $\mathbb{R}^n$  の有界な  $C^r \mathcal{A}$ -部分多様体は, アフラインな非特異な実代数的集合と  $C^r \mathcal{A}$ -同相である.

(19)  $f_1$  と  $f_2$  を  $\mathcal{A}$ -集合  $X \subset \mathbb{R}^n$  上の  $\mathcal{A}$ -関数とする.  $f_1$  と  $f_2$  の零点集合は同一, 又  $f_1$  が正になる  $X$  の点の集合は,  $f_2$  のそれと同一と仮定する. すると,  $X$  の  $\mathcal{A}$ -同相写像  $\pi$  が存在して,  $f_1 \circ \pi$  は  $f_2$  と  $f_2^{-1}(0)$  の近くで, 等しくなる.

(20)  $\mathbb{R}^n$  中の  $C^1$  Whitney  $\mathcal{A}$ -分割は, 局所的に,  $\mathcal{A}$ -自明である.

(21)  $M \subset \mathbb{R}^n$  を  $\mathcal{A}$ -部分多様体,  $X$  と  $Y$  を  $M$  の  $\mathcal{A}$ -部分集合とする. ある  $M$  の  $C^1$  同相写像が  $X$  を  $Y$  に移すと, 仮定する. す

ると,  $M$  の  $\pi$ -同相写像が存在して, それは  $X$  を  $Y$  に移す.  
 ( $C^1$  級の  $\pi$ -同相写像が取れると, 思うが, 証明はできていない.)

(22)  $X \subset \mathbb{R}^n$  をコンパクトな非特異代数的集合,  $f_1$  と  $f_2$  を  $X$  上の多項式関数とする.  $X$  の  $C^1$  同相写像  $\pi$  が存在して,  $f_1 \circ \pi = f_2$  となると, 仮定する. すると  $X$  の  $\pi$ -同相写像  $\pi'$  が存在して,  $f_1 \circ \pi' = f_2$  とできる.

(19) ~ (22) は (13) の応用である. すべての結果の証明は [1] で書かれる.

### 参考文献

- [1]. M. Shiota, Subanalytic geometry and PL topology.
- [2]. L. Van Den Dries, Remarks on Tarski's problem concerning  $(\mathbb{R}, +, \cdot, \exp.)$ , Logic Colloquium 1982, 99-121, Ed. by G. Lolli, G. Longo, A. Marja, North Holland, 1984.